

戦前における附属幼稚園の実際

－保育体制と保育の内容を中心に－

玉村公二彦・竹内範子
(奈良教育大学附属幼稚園)

Kindergarten Nursery Education under the World War II Regime: A Case of the Kindergarten Affiliated
with Nara Teacher's School in the Prewar Era

Kunihiko TAMAMURA
Noriko TAKEUCHI
(Kindergarten affiliated with Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学附属幼稚園は、1927年4月に奈良県女子師範学校附属小学校後援会によって設置され、奈良県女子師範学校附属昭徳幼稚園として保育の実践と女子教員養成の実習を担ってきた。その後、師範学校の官立移管にともない、戦時下において奈良師範学校附属幼稚園となったものである。本稿では、1948年度の卒園児であった同窓会員から提供された史料を示しつつ、特に戦時体制下における附属幼稚園の実際を自校園史の観点から整理する試みを行った。

キーワード：奈良教育大学附属幼稚園 Kindergarten affiliated with Nara University of Education
戦時体制下 under the World War II Regime、幼稚園の歴史 history of kindergartens

1. はじめに

本学附属幼稚園の歴史は、1927年4月、奈良県女子師範学校附属小学校のもとにあった後援会によって設立された私立幼稚園（昭徳幼稚園）が出発点である。その翌年、1928年4月に奈良県女子師範学校附属昭徳幼稚園となったものである。その後、1943年4月、奈良県師範学校と奈良県女子師範学校が、官立に移管され、奈良師範学校になるにともなって奈良県師範学校附属幼稚園となったものである。戦後は、奈良学芸大学附属幼稚園、奈良教育大学教育学部附属幼稚園、奈良教育大学附属幼稚園と変遷してきた。

戦後における幼児教育や保育政策の変化や教員養成の変容、大学そのものの役割の変化などを反映して、附属学校の役割も大きく変化してきた。その中で、一般に、一部の幼稚園を除いて、附属幼稚園の歴史は、附属小学校に比して、その実践の蓄積を歴史的に捉え返す研究として十分にすすめられてこなかったことも事実である¹。また、戦前においては、幼稚園教育の担い手としての教員（保母）は短期間での移動・異動となる場合が多く、歴史を継承し蓄積することの困難さもあった。戦後においても幼稚園の保育を担う教員も、必ずしも歴史研究や歴史資料の継承と整理・分析を意識的におこなう力量が鍛えられているわけでもな

い。更に、利用してきた子どもの側からも、保育期間は、戦前では一年保育と二年保育、戦後では2年保育から3年保育と短く、また、幼児であることから保育経験の記憶は不確かさを伴っている。

その意味では、本学のような大学附属の幼稚園の歴史の記録は、大学あるいは他の附属学校との関係での努力がとりわけ必要である。戦後70年を経ようとしている現在、昭徳幼稚園の開設から、90年を数えようとしている本学の幼稚園の保育の歴史も、資料的に充分に残せていないが、奈良県における幼児教育、あるいは初等教育への発信をし、その担い手を養成してきた歴史であることも事実である。

本稿で示す資料は、本学附属幼稚園の戦前における保育の実際を示す史料であり、2014年で卒園70周年となった当時の卒園児達が同窓会を開催した際に提供された写真や当時の保育の実際を示す史料である。

2. 附属昭徳幼稚園の発足と発展

附属幼稚園の前史として、すでに、1917年11月、奈良女子高等師範学校附属幼稚園が開設されており（東向北町）、東京女子師範学校附属幼稚園と共に、全国的な保母養成講習会が東京と奈良において開催されていた。全国的には、1926年4月に「幼稚園令」が出

され、幼稚園の設置の基礎となった。この幼稚園令に促されるかたちで、奈良県女子師範学校附属小学校後援会によって幼稚園の設立が企図された。奈良県女子師範学校附属小学校後援会長の名前になる募金の趣意書には次のように記されている。

「女子師範学校に幼稚園を附設することは法令にも規定せられてありますが、只今の本県の経済状態に於きましては到底之を許さないであります。為に同校の教育実習は、其の効果を十分に取め得ないことも有るかのように承って居ります。…附属幼稚園の設立をみますならば、同校教生の実習を完備ならしめ以て本県における女教員の素質を向上せしむることを得べく、ひいては本県初等教育の改善に貢献する所亦多大なることと確信いたして居ります。…奈良県の現状を顧みるに、その数一市十郡を通じて僅かに十指を屈するに過ぎない有様で、将来文化の創作と建設を双肩に担うべき幼児の保育に対しては、頗る冷淡なるものを遺憾とする次第であります」（「昭徳幼稚園開設募金趣意書」1927年1月）

このような動きに呼応して、医師久保井長通の所有であった用地（奈良市北魚屋東町の222坪強）が寄附され、幼稚園の敷地となった。1927年9月の新園舎の完成まで、附属小学校内の教室において保育が開始された。園舎の完成に引き続き、奈良県への移管の手続きが行われ、1928年4月より、正式に奈良県女子師範学校附属昭徳幼稚園となった。園児の定員は、各年40名の募集を行い、1年保育と2年保育をあわせて、80名であった。

以上のように、附属幼稚園の設立は、「幼稚園令」を受け、初等教育の女子教員養成の充実の要請に基づいて、女子師範学校のもとに模索され、県の財政事情から附属小学校後援会による私立として、設置されたのである。したがって、奈良女子師範学校附属幼稚園の名称とはならず、「昭徳幼稚園」として発足したのである。この名称は、1943年の師範学校の官立移管まで継続する。

附属昭徳幼稚園は、奈良女子師範学校、附属小学校と同一敷地内において、女子師範学校の教学と一体と

なり、保育と実習などを担っていく。女子師範学校及び附属学校園の配置を示したのが、図1である。発足当初は、女子師範の北に位置し、2つの保育室と遊戯室、職員室と応接室が建物の中に配置されていた。

この奈良県女子師範学校附属昭徳幼稚園は、設立にあたって「同校に於ける教育実習は特に幼児の取扱を研究し之に習熟するの良策」「同校教生の実習を完璧ならしめ」として、女子師範学校における教育実習の役割を担うことが企図されていた。したがって、教育実習は、附属昭徳幼稚園が開設された1927年度から始められていた。通常は附属小学校における教育実習期間中に幼稚園の教育実習は行われ、初等教育実習の一環として位置づけられていた。おおよそ、6月と10月～11月にそれぞれ1週間の実習を2グループ程度に分けて行っていた。

3. 戦時下における師範学校附属幼稚園の保育

1940年代に入ると学校教育は、大規模な再編がなされ、国民学校体制がつくられていた。また、「師範教育令」の改正に基づいて1943年4月、師範学校の官立移管がなされた。師範学校の附属小学校も附属国民学校となった。奈良の女子師範学校と男子師範学校は奈良師範学校に統合され、幼稚園も、女子師範学校附属昭徳幼稚園から、1943年、奈良師範学校附属幼稚園となった。1943年前後の幼稚園の保育の実際について、史料に基づいてその一端について示しておきたい。

3.1. 概要

官立移管によって、奈良師範学校の組織は²、師範学校長のもとに、本部、男子部、女子部の体制となった。女子部は、本科、予科、附属国民学校、附属幼稚園、事務室によって構成されていた。

1944年3月当方で、師範学校長林謙次郎のもとに附属幼稚園の管理と運営および実践を担当していたのは、園長石野悌（幼稚園主事大木哲郎が担当か）、主事大木哲郎、主任保母松本十三子、担任保母松田喜美子、数名の代用保母であった（写真1）。

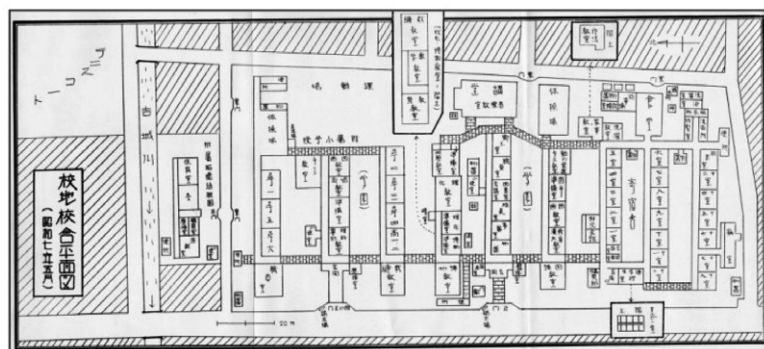


図1. 女子師範学校と附属学校園の配置（1932年）



写真1 附属幼稚園の園長、主事、保母（1944年3月）

園児は、定員80名で、1943年度卒園となる園児は、40名で、おおよそ、半数が二年保育であり、半数が一年保育となっていた³。

休業は以下の日及び期間として指定されていた。

日・祝日、皇后陛下御誕生、創立記念日（4月11日）、春日祭（3月13日）、春日若宮祭（12月17日）、そして、春期休業（3月25日から4月4日）、夏期休業（7月21日から9月10日）、冬期休業（12月26日から1月7日）である。

3.2. 1942（昭和17）年度から1943（昭和18）年度の保育の概要

附属幼稚園の沿革史から摘記した沿革の概要について、『附幼の五十年』よりそれぞれの年度に即して示したのが、次の事項である。

—昭和17年度—

入園児 40名

保育の一端 保育に関しては園外保育を多く行っている。春期遠足はあやめ池へ、秋期遠足は上粕、その他、正倉院前の広場、手向山八幡、新公園、川上、黒髪山等へ出かけている。

9月1日より1週間を心身鍛練保育となると書かれている。又、この年に書かれている「家庭教育振興会」「ラジオ教育研究会」などの名称も出て来るが内容については不明である。

4月18日、午後2時30分に空襲警報が発令される。それに対する処置について職員会議が開かれる。園児の登降園に対しては各地区別に通園班を決定する。

又、園児の栄養補給制としてピオカルク・ピオスゼリーを希望者に服用させる。

研究と研修 昨年に続き、園児に知能テストを実施するため、大西先生及び増課生2名が来園し、研究がされている。

10月10日に看護講習会を実施している。

勤労作業 代用保母は、石上農繁期託児所及び田部別所、豊田の託児所へ出張している。

—昭和18年度—

園名改称 4月1日、官立に移管される。

名称 奈良師範学校女子部附属幼稚園と改称する。

入園者年長組 21名、年少組 21名

警戒警報が発令され、ただちに園児を送り帰す。

戦時の保育 この年には、山本五十六大将の国葬があり、園児も遙拝式を行っている。

夏休みに入っても、7月末まで（日曜を除く）連日、「夏期鍛成保育」と称して。午前8時から午後3時30分まで保育を行う。その間おやつに牛乳、菓子等を与えている。夏休み中に藤棚修理を行い、その間東大寺裏の松林で「森の幼稚園」を開催する。

9月に、警戒警報が発令され、園児、職員で退避訓練が行われる。

靖国神社臨時大祭は遙拝をし、大詔奉戴日には念仏堂、氏神、春日大社参拝祈願をし、陸軍基地へ強行軍とすると記されている。

春期遠足はないが、秋はあやめ池へ遠足をしている。運動会は女子部附属国民学校と合同で行った。

救生実習 6月及び10月に各3回行われ、1回に12名～14名の実習生が来園している。

母の会 「幼児の栄養と母性の任務」と題し、講習会を開き、保育参観修了時に、防空頭布兼、通園カバン製作指導を行っている。

3.3. 戦時下の保育の実際

1942年から2年在園して、1944年3月に卒園者から提供された史料は、「お知らせ」（昭和17年、昭和18年、



写真2 「お知らせ」（昭和17年度、18年度）



写真3 「エガキカタ」（描画帳）

園と家庭との連絡帳)、「エガキカタ」(描画帳)、「ヨイコドモ」「園の思ひ出」「カルタ(手製)」などである。

「お知らせ」(写真2)によると、昭和18年の9月は夏期休業ではなく、9月1日から保育がはじまっている。1942年9月より開始された、心身鍛練保育として設定されていたものと考えられる(9月10日まで、通常は夏期休業の期間であった)。

「エガキカタ」は、描画の綴りであるが、昭徳幼稚園とあるので、1942年度のもの描画綴りであろう。綴られた描画には、「自由画」「印象画」のスタンプが押され、日にちが記されている。



写真4 「ヨイコドモ」



写真5 「園の思ひ出」

写真4の「ヨイコドモ」(昭和18年)は、1943年7月から夏期休業の記録である。冒頭、「明日から家庭での日課がはじまります。保育休止中のお母様の指導のもとに、よい子供としての生活を送らせ度く、ヨイコドモ、を製作いたしました。充分御活用下さりまして決戦下の夏を有意義にお過ごしください(後略)」と印刷されていた。「テンキ」「ハヤネハヤオキ」「ヨイアソビ」「オテツダイ」「アトシマツ」「ワガママ」「ビョウキ」の各項目について日々の点検ができるようになっており、家庭からの「幼児の生活状態」が1週間ごとに記されていた。

「園の思ひ出」(写真5)は、季節の行事のたびに作成した貼り絵等の綴りであり、おそらく卒園に際して記念としてそれぞれの子供に渡されたものと思われる。その中には、行事の貼り絵とともに「日章旗」「菊の紋」「兵隊さんありがとう」などの貼り絵があり、先の「決戦下」の記載とも重なった当時の世相を反映するものとなっている。戦時体制下の保育と幼児の生活の一端をしめすものである。

そのことをより明確に示すものが、写真6の「カルタ」である。昭和18年度の「お知らせ」には、昭和18年11月1日、「カルタを製作いたします故、なるべく多数の古葉書をお持たせ下さいませ」と記されていることから、1943年11月から翌年にかけて取り組まれてのものであろう。その3分の2の内容は、戦争に関するものである。写真に示したものの以外では、次のよ

うなものがある。

「コウサンサセヨ ベイエイゲン」「シンデモ ハナスナ ソノラッパ」「キモンブクロラ ツクリマセウ」「ヤスクニジンジャニ オマイリシマセウ」「ヘンタイヒカウキ トンデキタ」「ソラヤマモル ニツボンノヒカウキ」「センシャハゴウゴウ トツゲキダ」「ウミヲマモル ニツボンノグンカン」「ニツボンイイクニカミノクニ」「サットトビダス ギョライスキライ」などである。これらは、家から持ってきた古葉書を2等分して、絵を張ったり書いたりしたものに、読み札をあわせたものである。



写真6 「カルタ」

この時期、全国的には、第二次世界大戦の下で教育体制は再編され、幼児教育や保育に関しては、高等女学校に幼稚園又は託児所を附設することが奨励された(1943年3月、高等女学校規定の改正)⁴。「銃後を守る」として女性の労働力と育児の場が要請された。「学徒戦時動員体制確立要綱」(1943年6月)によって、女子学生は勤労働員が強化された。附属幼稚園の代用保母もまた農繁期託児所などへの勤労作業へと動員されていた。また、1942年4月に、京阪地区への米軍機の本土爆撃が初めて行われ、戦局は一層非常事態となっている。空襲警報や登降園時での対応が職員会議で議論され、在園時警戒警報発令の際の休園帰宅などが実施されていた。

附属幼稚園の保育も戦時体制の色彩を強くもった日常の生活と取り組みとなっていたことが伺える。

3.4. 卒園児のその後

戦時体制のまっただ中で附属幼稚園の時代を過ごした第17回卒園生の卒園写真を写真7に示した。1944年3月に卒園した卒園児たちは、1944年4月には附属国民学校に入学し、1945年に敗戦を小学校2年生で経験し、師範学校女子部の附属国民学校として、黒塗り教科書での学習の経験を経て、1947年、再度、奈良師範学校女子部附属小学校にもどり、戦後新教育の模索の中で、吉城プランでの実験的な取り組み、滋賀大

学の附属小学校児童との交流などを経験した。また、1947年の学校教育法の施行にともなって附属学校の再編がなされ、1947年に設置された、奈良師範学校附属中学校へ進学していくこととなる。1950年に男子部と女子部の両附属小学校が合併したことから、この卒園児達の小学校卒業の際に、女子部附属小学校と男子部附属小学校は附属小学校に統合され、発展的に継承されることとなる。附属小学校卒業後、附属中学校に進学したものも多く、新たな経験を積んでいくこととなる。



写真7 第17回卒園生卒園写真(昭和18年度)

4. おわりに

全国の附属幼稚園の歴史的な研究は、東京女子高等師範学校及び奈良女子高等師範学校の附属幼稚園のようにわが国の幼児教育と保育者養成を先導してきた園を除いて充分行われているとはいえない。本学の附属幼稚園も、奈良女子高等師範附属幼稚園の設置(1929年開園)から遅れて、奈良女子師範学校附属小学校後援会によって設立されるという希少な設立の経過をたどっていた。その幼稚園の保育においても、奈良女子高等師範学校附属幼稚園が関西のモデル的な役割を果たしたことからすると、その役割は初等教育における女子の教員養成を補完する実習園の役割が大きかったものと考えられる。その意味では、奈良女子高等師範学校附属幼稚園の現存する保育日誌に基づいた保育の実際が示す歴史研究⁵のように、史資料上の制約もあり附属幼稚園の保育の内容を詳らかにすることは残念ながらできない。

とはいえ、戦後70年を迎えるにあたって、戦前の学校園の教育や保育を考える上で、附属学校園の果たしてきた役割は少なくない。あらためて、本学附属学校園の来歴とその果たしてきた役割を、教育や保育の実際から掘り起こしていくことが求められている。そのような中で、そこでの教育や保育を担ってきた人々からのみならず、附属学校での卒園児や卒園生の教育経験をそこでの教材や思い出から跡づけるというオー

ラルヒストリーの重要性が増している。今回、卒園70周年の同窓会を契機として、園児の側からの貴重な資料を提供していただき、奈良教育大学附属幼稚園の保育の歴史の空白の一部を埋めることができた。今後とも、本学附属学校園の史資料の発掘やオーラルヒストリーの蓄積を行っていくとともに、全国的な附属学校園の成り立ち、とりわけ附属幼稚園の成立と歴史に果たした役割を検証していくことを課題としたい。

謝辞

この度、奈良教育大学附属幼稚園の歴史に関して、貴重な資料と写真を提供していただいた谷村頼迪さん、山本玉代さんをはじめとして昭和19年3月卒園者のみなさんには貴重なお話を伺うことができました。記して感謝申し上げます、みなさまのご健勝をお祈り申し上げます。

- ¹ 藤枝静正『国立大学附属学校の研究』(風間書房、1996年)の分析は、附属小学校が圧倒的に大きな位置を占めている。
- ² 1944年師範学校規定綴による(『奈良教育大学史』、p.491)
- ³ 1943年度卒園児のうち、保育経過のわかっているもの21名中12名が二年保育、9名が一年保育であった。
- ⁴ 「幼稚園教育制度の整備と戦時下の動向」(文部省編『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年、pp.204~222)
- ⁵ 高槻教恵「昭和一八年度の奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育の実際」(『日本における保育実践史研究-大正デモクラシー期を中心に』お茶の水書房、2010年、pp.133-152)。

参考・引用文献

- 文部省編『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年。
奈良教育大学創立百周年記念会編『奈良教育大学史』奈良教育大学、1990年。
附幼50周年記念誌編集委員会編『附幼の五十年-創立50周年記念誌』奈良教育大学教育学部附属幼稚園、1978年。
高槻教恵『日本における保育実践史研究-大正デモクラシー期を中心に』お茶の水書房、2010年。
奈良県女子師範学校編『奈良女子師範学校三十年史』奈良県女子師範学校、1932年。
藤枝静正『国立大学附属学校の研究』風間書房、1996年